様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０５４３

研究課題名（和文）言語運用における発想法の地域差と社会的・歴史的背景についての研究

研究課題名（英文）The study of regional differences and the social and historical background of thinking in language operation

研究代表者
小林　隆（Takashi, KOBAYASHI）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：００１６１９９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　日本語にはその構造面だけでなく、運用面にも地域差が存在する。すなわち、複雑で加工的な言葉遣いへの志向は近畿を中心に見られ、一方、単純で素朴な言葉遣いへの志向は東北を中心に認められる。そして、そのような地域差は、コミュニケーションの活性度の違いや、言葉への依存度の異なりによって生み出されてきた。さらに、その背景には、社会構造の地域差、すなわち、都市型社会と農村型社会の違いと、その歴史的展開が影響を与えていると考えられる。

研究成果の概要（英文）：　In Japanese differences among regions also exist in an operating aspect as well as its structure side. Oriented to the complex processing wording it was seen mainly in the Kinki, on the other hand, oriented to the simple and rustic wording is found mainly in the Northeast. And such regional difference has been invented by the activity of the communication and the dependence to the language. In addition, in the background, regional differences in social structure, ie, it is considered that the differences between urban society and rural society, its historical development has affected.

研究分野：日本語学

キーワード：言語的発想法　言語運用　言語行動　表現法　日本語方言　日本語史　地域差　社会差

１．研究開始当初の背景

従来の方言学では、狭い意味での言葉の構造面（音・形態、意味）を対象とすることがほとんどであり、その運用面についての研究が遅れていた。しかし、最近では、言語学・日本語学の研究動向の刺激を受けて、方言学の分野でも言語運用面についての関心が高まりつつある。方言学にとって、そうした言語運用面の地域差についての研究は、今後開拓すべき重要課題の一つと認識されている。

また、このような言語運用面に関する研究は、方言学の内部にとどまるのではなく、現代語研究や日本語史研究との連携が求められている。方言学的に言語運用面の研究を行う場合にも、現代語や日本語史の知見・視点を取り込み、相互の関係を明らかにすることが必要になっている。

さらに、方言学の研究分野の一つに、方言の歴史的な形成をテーマとする方言形成論があるが、この分野は近年あらためて活性化しつつある。言語運用面における地域差についても、その形成過程や要因を検討し、言葉の構造面における方言形成との共通性や異質性を明らかにすることが期待されている。

２．研究の目的

日本語方言における言語運用面の発想法の地域差と、それに影響を及ぼす社会的・歴史的背景との関連を検討し、その全体像について確実性の高い一定の見通しを得ることを本研究の目的とする。

この目標を達成するために、具体的には次のような研究を行うこととする。

(1) 理論的検討：「社会と言語運用の関係モデル」および、「言語的発想法」という概念と７つの分類について、理論面での検討を行い、より妥当性の高いものに仕上げていく。

(2) 実証的検討

①言語運用面：言語的発想法を抽出するためには、現象面としての言語運用の把握が不可欠である。既存の資料の整備や新たな調査の企画によってデータの充実を図り、地域差の把握をより確実かつ詳細なものにしていく。対象は、談話そのもの、あるいは、談話レベルで機能を発揮しやすい言語分野を取り上げる。具体的には、感動詞やオノマトペの使用、挨拶の実態、言語行動のあり方、談話展開の方法などである。

②言語環境・言語態度：この２つについては今のところ推定に頼っていたので、この研究においては、実態調査や意識調査を実施することによって実証性を高めたい。

③社会構造：民俗学・文化人類学や社会学、日本史学等、関連分野の研究をもとに把握する。

④中央語史上の変遷：方言形成の原動力となる中央語史の状況について、先行研究から把握すると同時に、挨拶の種類・頻度については文献調査を行う。

(3) 総合的考察：以上の理論的検討と実証的検討の結果を総合的に考察することで、言語運用面における発想法の地域差が、社会的・歴史的にどのように形成されてきたかを論ずる。

３．研究の方法

研究目的を達成するために、「理論的検討」と「実証的検討」とを両輪とする研究を展開する。特に、実証的検討においては、研究目的に記した「社会と言語運用の関係モデル」の妥当性について考えるために、次のような試みを行う。

(1)「言語運用面」と「言語環境・態度」の検討においては、一定の基準による等質的なデータで両者の関係を分析するために、新しく全国調査と重点地域調査を企画する。

(2)「言語運用面」のデータは、特定の指標を設定し、広範囲の資料から効率的に収集する。

(3)「言語環境・態度」の検討では、インタビュー調査によって話者の意識面を探る。

(4)文献についても調査を行うことで、中央語の変遷と地域差との対応関係を見ていく。

最終的には以上のような試みを総合することで、研究目的に対する結論を得る。

４．研究成果

方言の地域差は音韻や文法といったいわゆる構造な範疇を超えて、ものごとをどのように表現するかという、そもそもの考え方の面にも認められる。この“考え方”とは例えば、言語に対する規範意識とか、言葉遣いのある種の好みのようなものと言ってよい。このような、言葉を操る考え方のことを、本研究は「言語的発想法」と名付けることにする。そして、そうした発想法の違いは、言葉のあらゆる面に認められることが予想されるが、とりわけ、表現法や言語行動といった言語の運用面にこそ発現しやすいのではないかと考えられる。

ところで、言語的発想法は人間の思考法の一つであるだけに、言語使用者が生活する社会からの影響を強く受ける可能性が考えられる。すなわち、どのような特徴をもった社会に生まれ育つかということが、人々の言語環境のあり方、例えば、コミュニケーションの頻度や種類を左右することは十分にありうる。また、目的達成のために、どの程度言葉に依存した行動をとるかといった言語に対する態度の面にも、社会の特性が反映するはずである。そして、そうした言語環境や言語態度のあり方が、それに応じた言語的発想法を生み出していくのではないかと想像される。こうした影響関係の仕組みを、ここでは、「社会と言語運用の関係モデル」と呼ぶ

ことにする。

言語運用
（表現法･言語行動）
↑
言語的発想法
↑
言語環境・言語態度
↑
社会構造

図　社会と言語運用の関係モデル

本研究では、それらの言語運用（表現法・言語行動）の背後に潜む言語的発想法を抽出し、その地域差について論じることが主要なテーマとなった。

結論として、日本語方言には、次の７つの視点に集約される発想法の地域差が存在することを明らかにした。

発言性：あることを口に出して言う、言葉で何かを伝えるという発想法。
定型性：場面に応じて、一定の決まった言い方をするという発想法。
分析性：場面を細かく分割し、それぞれ専用の形式を用意するという発想法。
加工性：直接的な言い方を避け、手を加えた間接的な表現を使うという発想法。
客観性：主観的に話さず、感情を抑制して客観的に話すという発想法。
配慮性：相手への気遣い、つまり、配慮を言葉によって表現するという発想法。
演出性：話の進行に気を配り、会話を演出しようという発想法。

そして、これらの言語的発想法は、日本列島において、具体的には次のような地域差となって現れていることを指摘した。

発達地域：近畿地方
準発達地域：西日本（九州を除く）、東京
準未発達地域：東日本（東北を除く）、九州･琉球地方
未発達地域　：東北地方

さらに、そうした言語的発想を生み出す社会構造の特徴として、社会組織のあり方と商工業・交通の状況に注目した。すなわち、近畿を中心とした西日本は、社会組織の面で「宮座組織（講組社会）」「年齢階梯型社会」としての性格が強く、商工業や交通は早くから発達が認められる（後者の点は、関東にもあてはまる）。そして、このような社会は、人的接触が活発であるとともに階層の流動性が高く、また、民主的な決定システムを備えていて話し合いが重視されるという特徴を示し、それが上記のような言語的発想法の発現につながったと考えた。一方、東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本は、社会組織の面では「同族組織型社会」としての性格が強く、また、商工業や交通の発達が遅れたが、このような社会は上とは逆の性格をもつため、言語的発想法が現れにくかったと推定した。いわゆる都市型社会と農村型社会の対立に社会組織の違いが加わり、言語的発想法に影響を与えていると考えたことになる。

以上のように、本研究はこれまでの方言学が主に言語の構造面を対象としてきたのに対して、言葉の運用面の地域差にも視野を広げることに成功したと言える。しかも、「言語的発想法」という概念を導入することで、単に現象面の理解だけでなく、それを生み出す人々の発想法や社会構造との関連の中で方言の形成を考えようとした点が独創的であった。

本研究の成果は、日本語方言形成論にとっても新たな視点を提供するものと思われる。また、言語運用面についての方言研究や日本語史研究においては、この研究が、今後一つの指針を与えるモデルとしての役割を果たすはずである。さらに、この研究は、広く文化の形成をテーマにするものであり、他の文化科学との学際的研究にも発展する可能性がある。日本国内に存在しながら意外と気づかれていない地域間コミュニケーションギャップの問題にも、学術的・実用的の両面から刺激を与えることが考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

１．小林隆「猫の呼び声の地理的研究－動物に対する感動詞－」,友定賢治編『感動詞の言語学』,ひつじ書房，215-236 頁,2015 年，査読無
２．小林隆「方言形成論の到達点と課題－方言周圏論を核として－（改定版）」,小林隆編『柳田方言学の現代的意義』，ひつじ書房，339-384 頁,2014 年，査読無
３．小林隆「あいさつ表現の発想法と方言形成－入店のあいさつを例に－」,小林隆編『柳田方言学の現代的意義』，ひつじ書房,99-124 頁,2014 年，査読無
４．小林隆「配慮表現の地理的･社会的変異」,野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性』,くろしお出版，37-54 頁,2014 年，査読無
５．小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実「言語行動の枠組みに基づく方言会話記録の試み」,『東北文化研究室紀要』55,1-35 頁,2014 年，査読無
６．小林隆「大規模方言分布データの構築に向けて－東北大学方言研究センターの全国分布調査－」，熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析成果報告書－言語地図と談話資料－』国立国語研究所共同研究報告 12-05,143-155 頁,2013 年，査読無
７．小林隆・澤村美幸「驚きの感動詞「バ」」,小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』,東北大学国語学研究室，165-188 頁,2012 年，査読無

８．小林隆「方言形成論の到達点と課題－方言周圏論を核として－」,『東北大学文学研究科研究年報』61,107-143 頁,2012 年，査読無
９．小林隆「感動詞「猫の呼び声」」,『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』,東北大学国語学研究室,162-172 頁,2011 年,査読無

〔学会発表〕（計７件）
１．小林隆「東北方言の特質と形成に関する試論」,国立国語研究所「方形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会，コラッセふくしま，2013 年 12 月 21 日
２．小林隆「共通語形の分布と伝播について」,大規模方言データの多角的分析ワークショップ,全国町村会館，2012 年 12 月 16 日
３．小林隆「ものの言い方、西・東」，北海道方言研究会例会第 200 回記念大会,北海道大学，2012 年 11 月 18 日
４．小林隆「あいさつ表現の方言学－あいさつ表現の発想－」,日本方言研究会シンポジウム,富山大学，2012 年 11 月 2 日
５．小林隆「配慮表現の地理的・社会的な変異」,シンポジウム日本語の配慮表現の多様性,科学技術館,2012 年 9 月 23 日
６．小林隆「知られざる地域差を探る－表現法・言語行動,そして発想法－」,大規模方言データの多角的分析研究会，東北大学,2012 年 8 月 25 日
７．小林隆「方言周圏論の現在」,東北文化研究室柳田国男五十年祭記念シンポジウム,東北大学,2011 年 11 月 20 日

〔図書〕（計５件）
１．小林隆・澤村美幸『ものの言いかた西東』,岩波書店，230 頁,2014 年
２．小林隆（編著）『柳田方言学の現代的意義－あいさつ表現と方言形成論－』，ひつじ書房，393 頁,2014 年
３．野田尚史・高山善行・小林隆（編著）『日本語の配慮表現の多様性－歴史的変化と地理的・社会的変異』,くろしお出版，319 頁,2014 年
４．小林隆（編著）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』（編著）,東北大学国語学研究室,286 頁,2012 年
５．小林隆（編著）『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』（編著）,東北大学国語学研究室,241 頁,2011 年

〔その他〕
ホームページ等
http://www.sal.tohoku.ac.jp/hougen/
http://www.sinsaihougen.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　隆（KOBAYASHI Takashi）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00161993